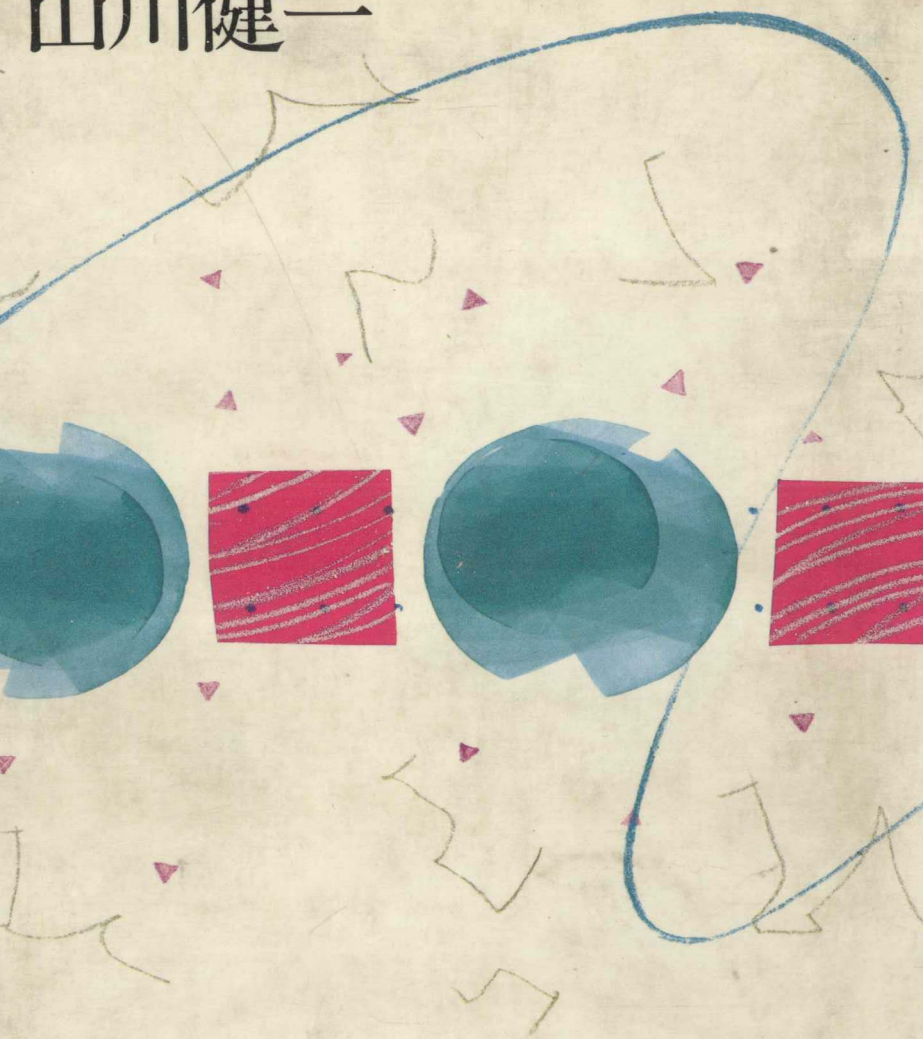


サンタのいる空

山川健一



サンタのいる空

山川健一

サンタのいる空

定価二二〇〇円

©一九八三

昭和五十八年七月十五日初版印刷
昭和五十八年七月二十五日初版発行

著者 山川健一

発行者 高梨 茂

印刷 三晃印刷
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目一八七七

振替 東京二二三四

検印廃止

目次

花火 5

サンタのいる空 31

華やかな夜 65

乾いた部屋で 113

鋼のように、ガラスのように 155

装帧
小林静子

山川健一短篇集
サンタのいる空

花
火

テラスに坐つて、細長いグラスでビールを飲んでいた。今しがたボーイがやって来て、グラスをとり換えたところだ。これが、三杯目のビール。アメリカ製のビールだったから、アルコール分も色合いも薄く、ソーダ水のような感じだった。

中程が少しばかりふくらんだグラスは、外側に細かな水滴を浮かべ、時間が経つにつれてこの水滴が互いに繋がり、もっと大粒の水滴になって流れ落ちる。グラスを手にとると、木製のテーブルに丸い輪ができていた。

腕時計を眺める。四時二十分だった。まだ、夏枝はやって来ない。

ホテルの前の広場には、果物や駄菓子や装飾品の露店が出て、人々は陽気に喋り合いながら広場のあちこちに立っている。ちらほらと、浴衣姿の若い女の姿も見えた。スタンドで生ジュースやラムネを飲んだり、ビールやウィスキーを飲みながら、皆、川の方こうで始まる花火を待っている。今日は、川開きの日だった。

広場の人込みの中で、誰かが爆竹を鳴らした。若い女の嬌声が、とても華やいだものに聞こえる。広場の隅にビヤガーデンがあつて、そちらでも、大きなジョッキで生ビールを飲んでゐる。五時になつて会社が出来たら、向こうのビヤガーデンも、こちらのテラスも、白いワイシャツにネクタイをした勤め人達で一杯になるだろう。彼らの集団にはほとんど必ず、職場の女達の姿が混じつてゐる。そして、不思議に、彼らは皆申し合わせたように、陽気で朗らかな表情をしてゐた。時計を見る。五時前だった。

ホテルの部屋から花火を眺めてみたい、と言ひ出したのは夏枝の方だった。だからこうして、ぼくはツイン・ルームをとつて、テラスで待つてゐる。四時には来ると言つてゐたのだが、彼女は氣が変わつたのだろうか。だがそうならば、もっと早く連絡して来るべきだった。遅くとも、昨晚のうちに連絡して来るべきだったのだ。ベッドが二つ並んだあの部屋が、無駄になつてしまふ――。

ビールに口をつけた。冷え過ぎていたビールは、ちょうど喉越しのいい感じになつてゐる。ポテト・チップスの端をつまんで、半分程のところから歯を当てた。乾いた快い音が耳に届く。そしてまた、ビールを飲む。

テラスの奥に作られた簡易ステージで、太った外国人の男がアコーディオンを弾き始めた。五時になつたのだらう。五時になつたらショーが始まると、ホテルのロビーに貼り紙がしてあつたのを覚えてゐる。

やがて、赤いスカートに黒のベスト、白いブラウスを着た女がステップを踏みながらステージ

に出て来て、彼女の年格好からはおよそ想像することのできない、高く澄んだ声で歌を歌い始めた。彼女はアコーディオンの男よりもさらに太っていた。

女はカスターネットを鳴らしながら、テーブルの間を歩き始める。アコーディオンの男が彼女の後ろに続く。一段高くなったステージの上では、リズムボックスが抑揚のないリズムを弾き出していた。

ボーイがやって来て、コップに水を足してくれた。ぼくは煙草を注文した。

「何になさいますか？」

ぼくの差し出した二つの百円玉を受け取りながら、彼がそう訊いた。きっと、彼はぼくと同じぐらいの歳なのだろう。

「何でもいいです」

「何でも？」

煙草の銘柄など、何でも良かった。

「ええ、チェリー以外なら何でも」

「はい、分かりました」

テーブルの上の、木目の模様を眺めてみる。山脈と溪谷が入り組んだ地図を眺めているようだ。山脈と深い谷が縦に続き、あとは広大な平原が広がっている。砂漠をセスナ機で横断しているような気がする。都市は、どのあたりにあるのだろうか。いや、人間の手が築いたコンクリートのブロックなど、この索漠とした自然に較べれば小さなものだ。

時刻は五時十五分。夏枝はまだやって来ない。

夏枝の面長な白い顔と、切れ長のすずしい目を思い浮かべる。そして滑らかな頸筋と、やわらかく膨らんだ肢体。ぼくは、彼女を、いつでもそんな具合に眺めていただけなのかもしれない。そうすることによってしか、ぼくらの中に何かしら交流しているものがあるのだと感ずることはできなかった。それは、ぼくが自分の心の在り様をそんなふうに制御していたということにも原因はあったかもしれない。だが何よりも、夏枝の方に安易な心の交流を拒否しようとするような、頑ななところがあったことが大きな理由の一つになっている。

夏枝は、淡泊な性格の女だった。ものごとに対する執着というものがまるでないような、何ごとに対しても関心を示さないような、そんな女だった。彼女の心の中の喜怒哀楽を読みとるのはむずかしかった。心の中の抑揚を、ひっそり胸の中にしまい込んでしまうのだろう。そんな彼女には、友人らしい友人もおらず、おそらくずっと以前から、ぼく以上に親しい友人はいなかったに違いない。そのぼくにさえ、彼女が本当は何をどう感じているのかということとは判らないのだった。

夏枝は下町の三人姉妹の末っ子で、幼い時に父親に死別したこともあって、母親と祖父に甘やかされて育ったらしい。それであのような性格になったのだろうか。そんな彼女が、人によって、冷淡で、若いくせに明るく朗らかなところと欠けるように見えるのかもしれない。他人の努力を冷笑しているように見えるらしく、特に年上の同性には、ほとんど憎まれると言っている程悪い印象を与えてしまうようだった。

ボーイが持つて来た煙草の封を開ける。一本抜き出して口にくわえ、マッチがないので手を挙げてもう一度彼を呼ぼうとしたが、ふと見ると灰皿の中に紙のマッチが置いてあった。火をつけると、火薬の匂いが川の方から渡って来る風に乗った。

赤いスカートの太った女が、テーブルのすぐ傍にやって来て、ぼくの顔を覗き込みながら歌い始めた。鮮やかに赤い口紅、白く大きな前歯、強く匂う香水。ぼくは、広場の方へ視線を外した。隣りのテーブルでコーヒーを飲んでいた年老いた男女が、だらしなく笑いながら手拍子をとっている。男の方は夏だというのにスーツを着込んで、きっちりネクタイを締めている。彼らは二人とも枯木の棒のように痩せており、それが歌を歌う女とアコーディオンの男の恰幅の良さと対照的で可笑しかった。

夏枝はいつの間にかぼくの部屋へ通って来るようになったが、まるで空気が水のように、ぼくは彼女の存在をあたり前のものとして受けとめていたようだ。二人になっても、ぼくの生活は以前と少しも変わるところがなかった。ぼくはよく街を歩き回ったが、その時に眺める、長く続く石の塀や、車がぎっしりつまった道路や、公園のように、夏枝という一人の人間を見ていたのだ。しかし、弁解するつもりはないけれども、ぼくにはまず見ることが必要だったのだ。彼女との関係の中からぼくが何かをくみとることができるのだとしたら、それはおそらくぼくが彼女の姿をくつきりと見ることができた後のことだった。ぼくはまず、見ることから始めなければならなかった。だから喧嘩する時でも、ぼくは本気で腹を立てたことなど一度もなかったような気がする。彼女の心に立った激しい波を、まるで貴重なフィルムでも眺めるように、見ていたのだ。

以前夏枝は都内に自分の部屋を借りていたので、喧嘩するとそちらへ行ったり何の連絡もよこさなかった。こちらが迎えに行かない限り、彼女は決して帰って来なかった。電車に乗って彼女を迎えに行きながら、ぼくは自分の見たものが深く静かに胸の底に沈んでほしいと願っていた。そうなれば、夏枝はもう決して、ぼくの手のひらから零れ落ちることはないだろう。しかし、そうした願いは、間違っていたのかもしれない、今ではそう思う。

テラスの前に植えられたプラタナスの枝が、テーブルに翳を落としていた。輪郭が明瞭だった一枝一枝の葉の翳は、かなり長くなっており、間延びして見えた。木陰に入って休んでいる浴衣がけの女達、老婆と彼女の小さな孫達。風に葉が揺れると、細かな翳が彼らの軀の上で揺れている。ぼくは彼らを見る、特に腰の曲った老婆を。薄鼠色のワンピースから伸びた二本の枯木のような足、染みだらけの顔の皮膚、異様に白い二の腕。やがて、スラックスをはいた中年の女が木陰へ走って来る。彼女はアイス・キャンディーを持っている。二本は彼女の子供達のために、そしてあとの二本は老婆と彼女自身のために――。ぼくは、老婆がキャンディーをしゃぶる様から、目を外らすことができない。気味の悪い程鮮やかな、黄色のキャンディーと桃色の舌。

西日ばかりが射し込む木造アパートの二階の、ぼくの六畳間。アスファルトとコンクリートで被われた街は夜になっても熱がひかず、夜眠りながらもうなされる程だった。建物という建物が冷房しているので、その分だけ気温が高くなるのだらう。しかも、少しも風が入らなかった。いつの頃からか、ぼくの隣りには夏枝の床がのべてあって、パジャマ姿の彼女が眠っていた。どんなに暑くても、寒くても、夏枝は穏やかな表情をして眠っていた。冬の、冷え込みの最も厳し

い夜は、彼女はソックスをはいたまま床についた。

その部屋からもう二年以上、ぼくは会社へ通っていることになる。貯金が五十万円になった時、ぼくは会社を辞めようと思っている。五十万円という額に、特に根拠があるわけではない。ただ、一つの目安が必要なのだ。

生ぬるいビールを飲みほした。夏枝は、本来に來ないつもりなのだろうか。

一生レストランでウェイトレスをやるのは嫌だと言って、部屋の隅にうずくまった夏枝は珍しく涙を見せた。つい、一週間程前のことだ。彼女がグチを言うのは、めったにないことだった。何か手に職をつけるために、専門学校へ行こうかな、と言って笑った。英文タイプとか、洋裁とか、美容師学校とか……。それじゃあ、タイピストや美容師なら一生やってもいいのかと言ってやると、彼女は黙り込んだ。おまえが死んだら悲しんでくれる奴がいるのか、おふくろと爺さんと、あとは俺ぐらいなものだろうか？ タイプを習って、洋裁ができるようになって、それがどうしたって言うんだ――。

下唇を、色が変わる程強く噛んでいた夏枝は、顔を上げてぼくを睨みつけながら言った。今よりはましだわ、と。今よりはまし？ それじゃあ俺が会社を辞めたら、今よりひどくなるとも言うのか。何も変わりやしないさ。ただ、俺はもう毎朝同じ時刻に同じ道通って会社へ行くのはごめんなんだ。行きたきや行けよ、タイプの学校へでも、洋裁の学校へでも。行ってみて、仕事をかえて、したら今と何一つ変わっていなかったと気がつくさ。

六時になっていた。あと三十分で、花火が始まる。約束の時刻からもう二時間も経つのに、夏

枝はやって来ない。広場にも川縁にも、かなりの人々がつめかけていた。団扇を帯に挟んだ浴衣がけの姿が目立った。

ボーイを呼んで、ビールをもう一杯注文した。

「それから、何か食べたいんだけど」

「少しお待ちください」と言って、ボーイはメニューを取りに行った。彼は無表情で、黒のタキシードが似合っていた。しかもそれでいて、能面のように雄弁にも感じられる。

メニューを開き、海鮮料理の欄を見る。

「ロブスターのテルミドールとサラダを一つ。それから、ポテト・チップスをもう一皿お願いします」

「はいかしこまりました」と言って、彼は向こうへ行ってしまう。

赤いスカートの女は、情感たつぷりに歌いながら、遂に踊り出した。広場にいる連中も彼女の踊りを眺めている。先刻の五つか六つの男の子と、彼の姉がテラスに乗り出すようにして踊りを眺めている。彼らは揃いの浴衣を着ていた。姉の方が男の子の両肩に手をかけ、耳許に口を寄せて何か言うのだが、弟の方は夢中になっているようで少しも表情が変わらない。

女は両手に皿を把み、音楽に身をまかせて伸び上がり、ほとんど陶酔した表情をして皿を投げた。勢いよく回りながら皿は宙に浮かび、彼女の足許に落ちて割れる。瀬戸物の割れる潔い音が、空気と床板を伝って、ほとくの軀に届く。何枚もの皿が宙に浮かんた。やがて、彼女の足許は割れた皿だらけになってしまった。それでも、破片のほとんどがステージの上にまとまっているところ